

佐賀県研究成果情報（作成 2026 年 3 月）

[情報名] 上場地域における焼酎原料用カンショの‘コガネセンガン’と‘みちしずく’の収量特性

[要約] 焼酎原料用品種の‘コガネセンガン’と‘みちしずく’は、上場地域において高い収量性を示す。‘コガネセンガン’は上イモ1個重が重く、収量450kg/aを確保できる。‘みちしずく’は上イモ個数が多く、収量520kg/aを確保できる。

[キーワード] 焼酎原料用カンショ、品種

[担当] 上場営農センター・研究部・畑作・野菜研究担当

[連絡先] 0955-82-1930・uwabaeinousenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 技術者参考

[部会名] 上場営農専門部会

[専門] 栽培

[背景・ねらい]

上場地域では、新規品目として焼酎原料用カンショを推進している。青果用カンショに比べると、外観等の品質制約は少ない一方、収益性を高めるためには収量の確保が重要である。そこで、焼酎原料用カンショの主要品種‘コガネセンガン’およびサツマイモ基腐病抵抗性品種‘みちしずく’の2品種の収量性を明らかにする。

[成果の内容]

1. ‘コガネセンガン’の上イモ収量は460～1000kg/a、株当たり上イモ個数は4.3～4.7個、上イモ1個重は320～650gである（表1）。上イモ収量と1個重との間に正の相関が認められる（図1）。
2. ‘みちしずく’の上イモ収量は530～630kg/a、株当たり上イモ個数は4.6～6.3個、上イモ1個重は300～340gである（表1）。上イモ収量と個数との間に正の相関が認められる（図2）。
3. ‘コガネセンガン’は、収量の年次変動が大きく、イモの肥大の差による。一方、‘みちしずく’は、年次変動が小さい（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本成果は、上場地域における焼酎原料用カンショの品種選定に活用できる。
2. 本成果は、場内圃場（玄武岩土壌）で得られたものである。定植日は5月中旬、収穫は10月下旬（約160日）、施肥量はN:P₂O₅:K₂O=0.4、1.5、2.0（kg/a）、栽植密度は336株/a（畦幅85cm、株間35cm）である。黒マルチを被覆し、斜め挿しで定植した。
3. 2025年は、挿苗後30日間の降水量5mm以上の出現日数が平年の5割、生育期間の総降水量が平年比7割であり、早魃条件下での試験結果である。気象庁アメダス唐津地点の準平年値降水量データ（2010～2025年）を用いた。
4. ‘みちしずく’は、サツマイモ基腐病抵抗性品種であり、(独)農研機構により育成された品種である。自家増殖を行う場合は、許諾の締結が必要となる。
5. ‘コガネセンガン’の平均収量は、鹿児島県における394kg/aを（日作九支報(76), 2010）、‘みちしずく’は育成地（都城市）における425kg/aを参考とした（いも類振興情報(154), 2023）。

[具体的なデータ]

表1. 各品種による収量性

試験年	品種名	つる重 (kg/a)	上イモ重 (kg/a)	上イモ個数 (個/株)	上イモ1個重 (g/個)
2024年	コガネセンガン	397	1001	4.7	652
	みちしずく	340	633	6.3	302
2025年	コガネセンガン	224	458	4.3	318
	みちしずく	295	527	4.6	342

注1) 定植日：2024年5月20日、2025年5月25日

注2) 収穫日：2024年10月25日、2025年10月28日

注3) 試験規模：1区5.95㎡(0.85m×7.0m)、3反復、各区20株のうち10株を調査した。

注4) 上イモは1個あたり50g以上

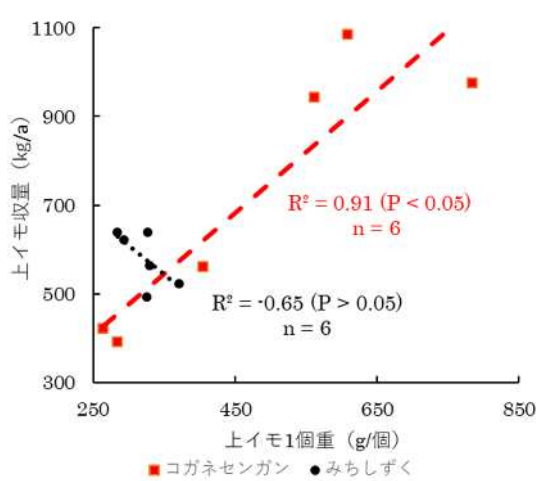


図1. ‘コガネセンガン’の上イモ収量と1個重の関係
注1) 相関係数は、2カ年(2024-2025)の各試験区の平均値に基づき、ピアソンの積率相関係数を用いて算出した。

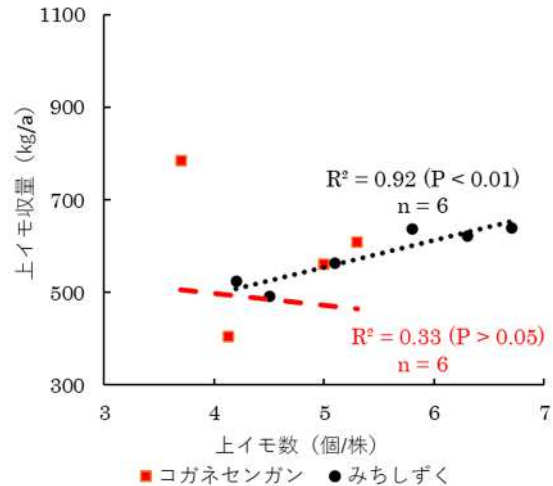


図2. ‘みちしずく’の上イモ収量とイモ数の関係
注1) 相関係数の算出方法は図1と同様(2カ年の各試験区に基づくピアソンの積率相関係数)。

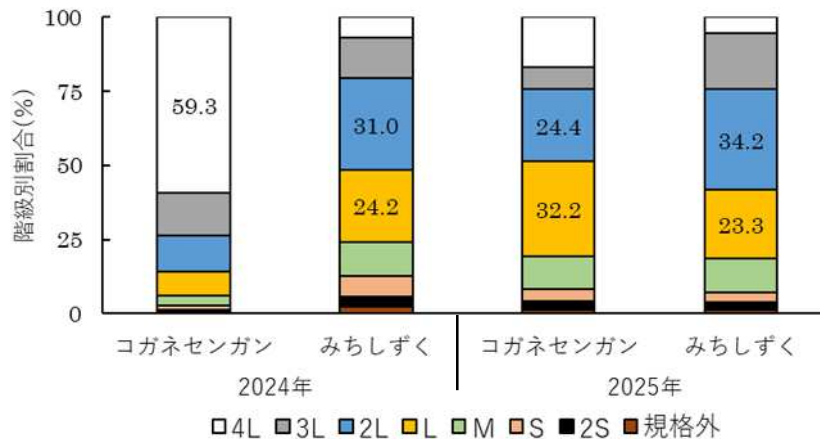


図3. 各品種によるイモの階級別重量割合

注1) 植付日、収穫日、試験規模は表1参照

注2) 規格の重量は、4L：800g以上、3L：600～800g未満、2L：400～600g未満、L：250～400g未満、M：150～250g未満、S：100～150g未満、2S：50～100g未満、規格外：50g未満とし、全収穫物重に占める割合を示した。

[その他]

研究課題名：上場地域における焼酎原料用カンショの安定生産のための技術確立

予算区分： 県単

研究期間： 2024年度～2025年度

研究担当者：宮地伯明、伊藤央子、坂口峻、糸山晴香